

大連引揚げ家族の記録

東京都 原 田 美津子

はじめに

昭和二十二（一九四七）年三月、旧満州の大連市より引揚者として日本に帰国した。それから今日まで、実に半世紀の歳月が過ぎ去った。引揚げのときには、再び大連の地を踏むことのできる日が来るとは考えられなかったが、時代と共にやがて大連への旅が可能となってきた。

しかし、旅順地区の開放は許可にならなかったが、私は、自由に旅順に行くことができるようになったならば、まず最初に生まれ育った旅順、そして大連を訪れようと心に決めて、その時期を待っていた。

最近、ようやく旅順の一部が開放されて、東鶏冠山、二百三高地、水師營、博物館などの観光が旅行日程に組み込まれるようになったので、引揚げ五十年を

記念して、平成九年の五月末、アカシアの花が咲く時期に夫と一緒にツアーに参加して待望していた旅順に行った。

わずか数日間の旅であったが、垣間見たかつての故郷は、懐かしい思いと共に、すっかり他人のものになってしまった我が家を見るような複雑な心境でもあった。しかし、長年の思いを果たして現実の中国を見たことで、私の気持ちにけじめをつけることができた。

旅順での生活

私は昭和三年八月二日、旅順で生まれた。両親と兄、弟の五人家族で、旅順第一小学校を卒業して旅順高等女学校に入学し、昭和十六年の夏休みまでの十三年間を旅順で過ごした。当時は、日本の陸海軍の軍人やその家族の多い街であったが、私が子供のころの旅順は、のんびりとした住みやすい生活環境であった。

大連に移る

昭和十六年の夏に、父の転勤で大連に引っ越した。兄が中学校四年生、弟が小学校四年生そして私は女学

校一年生の夏休みであった。大連神明高等女学校への転入試験を受けて無事に合格し、二学期より通学した。一年生のころまでは、戦時下であるという切迫した情勢はあまり感じられずに、厳しい規律の中にも都会的な華やいだ雰囲気のある誇り高い学校であった。学校生活にも慣れてきた十二月八日、ちょうど学期末試験の最中であった。教室のスピーカーから、「帝国陸海軍は、本八日未明、米英両国と戦闘状態に入れり」というニュースが流れた。思わず「怖い」と、みんな顔を見合わせてしまったことを今でも思い出す。

昭和十七年、二年生のころの大連はまだ平穏であったが、敵性国語である英語の授業は、二学期からクラスのみとなり、三年生からは全面的に廃止となった。昭和十八年の中ごろからは、大連でも衣料品、食料品などが不自由になり、戦争の激化とともに学校生活も厳しさを増してきた。服装もスカートは禁止、すそのしまったズボンをはくこと、髪はお下げにする、などが決められた。

体操の時間は、防空頭巾、軍手、救急袋を着けての担架訓練にかわり、包帯の巻き方や三角巾の扱い方なども習った。また、人を担架に乗せて運ぶ訓練も行った。これとは別に軍隊奉仕の時間も設けられて、陸軍の被服倉庫から学校内に軍服が運び込まれて、週一回、ボタン付け、ボタンホールづくり、そで裏のかがりなどを手作業で行った。軍服の最終仕上げをする作業であった。

看護婦の資格も戦時下では必要とのことで、乙種看護婦免許取得のための勉強も始まった。学校の隣に満鉄の大連病院があったが、その先生方が来校されて、看護学、生理学など受験に必要な学科の講義が講堂で、クラス合同の授業として実施された。実習は病院で直接、外来、病室、手術室で各班に分かれて行われた。病院側は、大変に厚意的で親切に面倒を見てくださった。卒業のときには、卒業証書の裏に、「乙種看護婦免許」のゴム印が押されていた。

昭和十九年秋に、陸軍特別看護婦制度が新設されて、各女学校から志願者を募集することになった。各

女学校から必ず何人か応募しなければならぬような
圧力を感じた。

お国のためにお役に立ちたいと願って自らの意思で
志願した人、家族の反対を押し切って応募した人たち
が、私たちの神明女学校だけでも十人がいた。盛大な
壮行会で送り出し、彼女らは学業半ばで勇躍、旅立っ
ていった。

旅順、大連が空襲を受けることはほとんどなかった
が、空襲警報は度々鳴るようになってきた。いつも青
い空を少数のB29爆撃機が、白い飛行機雲を長々と引
きながらはるか上空を飛んでいく。鞍山の製鉄所の爆
撃に向かっていらいと聞いていたが、正式の報道
で伝えられることはなかった。

男子中学生は軍需工場に動員されていたが、女子
学生は内地のようにたくさんの動員先もなく、昭和二
十年の一月になって、ようやく動員先が決まった。

しかし、軍関係、民間会社、病院、学校などが動員
先で、しかもほとんどの職場では一般事務の仕事で
あった。三カ月で卒業を迎えたが、その後も終戦の日

までその職場で働き続けた。

私は、陸軍衛生材料部隊に同級生三人と行くことに
決まった。朝日広場の近くにレンガ塀で囲まれた陸軍
関東倉庫があり、その広い敷地に、衛生、被服、そ
の他の材料倉庫があつて、それぞれ独立して建ってい
た。衛生材料部隊と言つても約三十人の少人数で、軍
人は隊長の薬剤大尉と総務の下士官の二人だけで、他
は日本人の軍属と現地雇用の中国人であつた。

私は研究室に配属されたが、薬剤師の室長の他に五
人ばかりで、こぢんまりとした事務室と研究検査室が
あつた。先輩の女性と二人で試験管やピーカーなどを
洗つたり、日報をつけたりするぐらいの仕事で、のん
びりと過ごしていた。お昼には時々、豆腐やら甘味品
などの配給があり、それを楽しみにしていた。

終戦後の生活

昭和二十年八月十五日、正午に天皇陛下の重大放送
があるとのことで、中庭に全員集合してラジオの前に
整列したが、雑音がひどくて何が何だか分からなかつ
た。戦争が終わつたらしいと、みんなが話し合つてい

るのを聞いた。そのうちに上司である技手が、酒に酔って泣きながら日本刀を振り回してわめいている姿をほう然として見守っていたが、やはり日本は負けたのだなと思うようになった。

翌日からは出勤しなくてもよいとのこと、再び関東倉庫に行くことはなかった。そのうちに、一緒に働いていた中国人が倉庫を支配しているということを知った。

終戦後のある暑い日、気が付くと我が家の裏手の電車の線路を、大勢の日本の兵隊さんが歩いていて、武装解除されていて丸腰であって、所々に銃を持ったソ連兵が監視のために立っていた。小休止なのか道端に腰を下ろし始めたので、急いで母と一緒に家からあり合わせの食べ物を持っていき差し入れをした。近所の人も何人か走って出てきたが、ソ連兵も制止も何もせずに、私たちのしていることを見ていた。私たちもまだ、ソ連兵の恐ろしさを知らなかったので、平気で行動していた。

これからどこに連れて行かれるのかと思うと胸が詰

まる思いで見送った。

終戦から数日たったころ、各家庭にある刀剣類は一つ残らず提出することとなるという話が伝わってきた。このうわさを聞いた父は、弟に手伝わせて裏の物置小屋の床を掘り返して、今まで大切にしていた日本刀を埋めてしまった。兄が入隊したので、任官したら軍刀に直して持たせるつもりでいたのが、戦争に負けたいはいえ、むざむざ提出するには忍びがたかったであろう。父の思いはよく分かっていたが、万が一に見付かったらどうなるかと不安な気持ちも残っていた。

八月下旬、大連にもソ連軍が進駐してきた。一期、ソ連兵による暴行、略奪がすさまじくなり、日本人家庭ではすべての戸を閉ざしてひっそりと家の中に閉じこもっていた。昼間、外に人の気配を感じたのでカーテンをそっと開けてうかがっていると、若いソ連兵が肩から自動小銃を掛けて隣の家の戸の前に立っていた。驚いたことに、腕には時計を五個ぐらい並べてつけている。しばらく戸をたたいていたが、間もなく

あきらめたのか何ごともせずに帰っていった。

そのころになると家々は、家屋への不法侵入を防ぐために、門には厚い木材を打ちつけ、通用口は内側から錠を掛けるようにしていた。外出も思うようにできなくなった。

弟が卒業した光明国民学校とその周辺の住宅は、間もなくソ連軍によって接収されてしまったが、ソ連軍の部隊が近い所にあるということで、あまり略奪、暴行の被害はなかったが、その反面、夜は引き揚げるまでの一年半の間、外出することはできなかった。

静かな夜に、ソ連兵の歌声が聞こえて来ることがあった。トラックで移動するらしく、すばらしい二部合唱で、その声が近づいてきては遠ざかっていくというハーモニーに聞きほれていた。昼間のあの粗野な行動をするソ連兵と、夜のあの美しいコーラスのソ連兵とは結び付かないものであった。

昭和二十年十月には、旅順市が中国側によって全面的に接収され、所在の日本人は全員、大連に強制移動をさせられた。家財、夜具それに衣類など生活に必要な

な物を持てるだけ荷車に積み込んで、家族全員で押しながら約四十キロメートルの距離を歩いて大連まで移動した。その途中の苦勞は筆舌に尽くし難いもので、待ち伏せしていた中国人の暴徒に襲われて、大事な荷物を荷車ごと略奪された家族もあったそうだ。

大連に着くと、知人の家や指示された家に行つて分宿したが、地区によってはその後も移動を余儀なくされて、なかなか落ち着くことのできない家庭もあった。我が家にも引揚げまでの数カ月、旅順からの二家族を受け入れて同居し、合計三家族が一つ屋根の下で生活をしていった。襖一枚の仕切りで、台所、便所、洗面所、風呂場は共同で使用するという大変な生活であった。

日本と朝鮮の銀行券は使えなくなっていて、ソ連の軍票だけが流通していたので、収入の無くなった私たち家族は、まず、家の中の品物売る生活から始まった。路上でロシア人や中国人に直接声を掛けて売る人たちもいたが、流通がとだえた百貨店や商店の陳列ケースを利用して委託販売をする日本人も多かった。

日本人形、西洋人形、大きな羽子板などのケースの中身はみんなからっぽになってしまった。貴金屬、毛布など売れるものから無くなっていった。ソ連軍の家族も増えてきたので、着物は洋服に仕立て直した方が高く売れるので、友達の家に行つて、一緒に仕立て直しの仕事をしてワンピースなどを作っていた。黒の留袖のすそ模様の部分を使つたり、フリルのたくさんついた洋服などで、日本人ではちょっと着れないデザインが多かつた。

昭和二十一年になると物価はますます高騰し、生活は苦しくなるばかりであつた。繁華街は表面的にはにぎやかであつた。私も浪速町のデパートの隣の店で働くこととなり毎日出掛けたが、そこは、委託販売のケースや生地を売るケースなどが雑居しているような生地屋で、中国人がオーナーであつた。

流通はとだえているのに、なぜか新品の生地が豊富であつた。お客は全部ロシア人で、片言のあいさつや値段の数字、高いとか安いとかの単語を並びたてるだけで商売はできた。一方、市街の映画館ではソ連映画

が上映されるようになり、「石の花」「シベリヤ物語」などを見たが、初めてみるカラー映画は美しく、現実の生活とはあまりにも掛け離れていることが切実に感じられた。

家の近くに大連運動場があつたが、その運動場の入口周辺に屋台が並びはじめて、立ち売りをする中国人や日本人でにぎやかになってきた。弟は終戦当時大連第二中学校の二年生だったが、八月十五日以後は学校も閉鎖されて、友達とたばこ売りをしたり、南京豆を板の上に並べてそれを肩からつり下げて売りに歩いたりしていた。しかしあまり生活費の足しにはならなかつた。

屋台には、たばこ、大福餅、南京豆、せんべいなどの品物があつたが、それを売って生活費を得ることは大変なことであつた。私たち家族の主食も、米や大豆や小麦粉などは価格が暴騰していても買うことはできなかつたので、とうもろこしの粉を蒸し焼きにしたパンや高粱のお粥、さつま芋の粉で作った蒸しパンなどが主食であつた。野菜は主として支那大根で、甘

味があり煮くずれしないので、目減りが少なくて重宝したものである。

昭和二十一年の後半になると、葫蘆島から引揚げが始まったということが風の便りに聞かれるようになってきたが、大連はいつになるのか、確かな情報は皆目入らなかった。日本人の間では生活の疲れも出てきて、不安といら立ちが高じて落ち着かない生活の日々となってきた。

まして、満州の奥地から着のまま、ここ大連まで逃げのびてきた開拓団などの人々の姿は哀れで気の毒であったが、残留孤児の問題が大連にもあったなどとは、当時は露ほどにも知らなかった。

ようやく引揚げの途に

内地との音信が全くとだえていたので、精神的にも、肉体的にも、生活的にも追い詰められていた両親にとっては、引揚げは切実なる願ひであった。しかし、父は冬を迎えるころから体調を崩し、気力もめつきりと衰え出して元気が無くなってきた。

ようやく大連地区の引揚げが本格的に始まったの

は、昭和二十二年の一月になってからであった。しかし、私たちの住んでいた若菜町は、一般人の中でも最後の方で、三月中旬になって順番が回ってきた。帯しんで作ったリュックサックを背負って、布団包一個と各人携行金千円が全財産となった。

アルバムから全部ががした思い出の写真と、外側の箱を外した小さな木目込みのひな人形一そろいは、是非とも持って帰りたいと思って布団包みの中に入れた。私たちは荷物と一緒にトラックに乗って集合場所である大連実業学校に向かった。

広い講堂は大勢の引揚者でいっぱいであったが、そこで一泊することとなった。翌日の出発前に荷物検査があった。検査を受けるために、重たい布団包を引きずりながら検査室に入ると、ソ連兵が中身をチェックしていた。そのソ連兵は、気が向くと開いた荷物の中からめぼしい品物を取り出して没収していたが、次々と大勢の人が同じように荷物を持って入室してくるの、面倒になるとあまりチェックをしなくなった。ちやうど幸いなことに、私たちの順番のころには面倒

になったのか、「ダワイ！　ダワイ！」と手を振って、荷物もほどかせずにどんどんと通過させた。布団包に忍ばせた写真もひな人形も無事で、ほっとしたものだ。

大連埠頭を振り返るゆとりも無く引揚船に乗り込んだ。あまり大きな船とも思えず、船名も記憶に残っていないが、多分、貨物船ではないかと感じたことを、うろ覚えに思い出す。

やっと帰国ができるという、安ど感で胸がいっぱいであった。今までは、私たちとは全く関係のない隔絶していた日本の船員が身近にいるという安心感と、中国人もソ連兵もいないという違和感が交錯していて複雑な心境のひとつであった。

引揚船の船室の天井は鉄板で、人がまっすぐに立つこともできないくらい低く各層に仕切られていた。その船底の船室まで引揚げの人々が、びっしりと詰め込まれていた。

外の様子は全く分からないが、大連港の外に出たらしく船は揺れ始めた。船には弱い母と私は、支給され

た軍用毛布をかぶって横になっていたが、その顔の上
に鉄板から水滴が、ぼたりぼたりと落ちてきて、しばらくは眠ることもできなかった。食事が支給されたが
起き上がる元気もなく、手もつけずに残していると、
隣の男の人が、船が揺れるとなお一層腹がすくという
ので食べてもらった。外の冷たい空気を吸えば、少し
は気分もよくなるのではないかと、休んでいる人々を
かき分けて甲板に出てみたが、灰色のどんよりとした
空と、見渡す限りの真っ黒な海と、高い波のうねりに
船が漂っていることだけだった。余計に気持ちが悪く
なって早々に船底に戻ってしまった。

「内地の山が見えるぞ！」という叫び声で、みんな
元気が出てきて、一斉に甲板に駆け上った。よく晴れ
ていて空気もすがすがしく、やっと気持ちも落ち着い
た感じがした。周囲の人たちも明るい顔になってい
た。遠くに見える内地の山々の緑が美しく朝日に映え
ていた。

それから大分時間がたってから、待ち望んでいた佐
世保港に入港した。

上陸の指示があつて、久しぶりに陸地に足を踏み入れた。上陸するとそこには、旧海軍の兵舎と思われる建物が数棟並んでいた。そのうちの一棟に引率されて入り、すぐに頭といわず、体といわず全身にDDTの白い粉をかけられて真っ白になった。大変な上陸第一歩であつた。日本への引揚げ第一夜は、この兵舎跡の収容所で、白くなった体で過ごした。しかし、つい数日前の大連での生活と異なり、何となく落ち着いた気分浸っていた。

引揚げ第一夜のショック

父の郷里は、福岡県山門郡東宮永村（後に町村合併で柳川市となる）で農業と精米所を営んでいた。

父は養子だったが、義母との折り合いが悪くそのために満州に新天地を求めたので、家業は義理の弟が継いでいた。一応は、元の養家を帰郷先としていたが、柳川の駅より数キロメートルも離れていたので、ひとまず駅に近い親類の家に寄つてそこで一晩泊めてもらったが、その家にも大連から引揚げの一家族が、私たちより早く引き揚げていて世話になつていたので長

居はできなかった。

座敷に上がり、無事に帰ってきたあいきつを交わし始めたが、そのときにその引き揚げてきた一家の男の子がきて、「甫兄ちゃんは死んだよ」と、いきなり言い出した。最初は何のことかちょっと戸惑つたが、すぐに兄のことだと分かつた。思い掛けない一言に、大人たちは声をのんだ。父母は、何も言わずに黙つて座り込んでしまった。沈黙の時間が過ぎていた。

兄は、大正十五（一九二六）年三月二十五日に旅順で生まれたが、幼いころから大変に体が弱くて、大病にかかつては入退院の繰り返しだったそう、小学校の上級のころも母が、「にんにく」のお灸を背中によくしていたことを思い出す。しかし、昭和十三年春に旅順中学校に入つて、テニス部で活動を始めてからすっかり元気になつた。

昭和十六年の夏に、父の転勤で大連に移り、兄も大連第一中学校に転校し、上級校の受験のため、毎日夜遅くまで勉強に打ち込んでいたが、五年生の冬に、下顎のリンパ腺がはれてきて大連満鉄病院に入院し手術

を受けた。結核性のためか傷口がいつまでもふさがらずに、上級学校の受験は無理ではないかと一応はあきらめたが、それでも頑張り通して、大連経済専門学校と旅順高等学校の両方に合格することができた。

昭和十八年、旅順高等学校に入學して大連から再び旅順の地に戻り、全寮制のため向陽学寮に入寮した。休日には白線の入った帽子にマントを引っ掛け、高下駄をはいて帰ってきたり、父のかすりの着物に袴姿で来ることもあった。母は、戦時下の乏しい食料の中からもらなにかと食べ物を持たせたり、私も買いためをしてきた良質のノートを渡したりしていた。両親にとって、心の充実した時期でもあった。

戦況は次第に厳しくなり、その年の秋には文科系の学生に対して学徒動員令があって、上級生は出陣した。昭和十九年には兄の同級生の中にも入隊した方がいたが、兄は早生まれだったので、昭和二十年三月の卒業まで学校に残っていた。しかし、徴兵年齢が一年引き下げられて数え年二十歳で徴兵検査を受けることとなり、兄は乙種合格となった。かつて患った中耳炎

の後遺症で片方の耳が聞こえないので、乙種になってしまったのであった。兄は残念がっていた。

昭和二十年三月、東京大学経済学部合格し、戦争の激化のさなか、朝鮮経由で上京したが、東京をはじめ内地の主要都市は空襲が激しく、兄の安否については家族で心配をしたが、大連では確かめる手段もなかった。

五月中旬、全く思い掛けずに兄の召集令状を受けた。満州の東寧第二九九部隊に現地入隊ということであったが、連絡の方法も無く父は困惑していた。警察の方で連絡を取り、再び朝鮮経由で大連に戻ってきた。

兄は我が家に一晩泊まって、家族の見送る中を大連駅から慌ただしく出征した。

大連駅の改札口で、角帽をとり戦闘帽にかぶり直して消えていった姿が、兄との永遠の別れとなってしまうた。

兄は終戦後、東満の捕虜収容所で作業中に地雷が爆発して、左こめかみ辺りに少し傷を受けたが、その

後、傷口からばい菌が入り破傷風となって死んだそう
だ。

そのことを知らせてくれた人は、同じ収容所にいた
大牟田出身の方で、同じ福岡県に帰るということでよ
く話し合っていたそうだ。その方は、兄の死後に収容
所を脱出して葫蘆島にたどりつき、昭和二十一年に引
き揚げてきて、兄の遺髪と爪を柳川まで届けてくだ
さったとのことだった。

やっとの思いで柳川にたどり着いた父母や私たちに
とっては、衝撃的な引揚げ第一夜であった。父や母に
とっては、兄が無事に柳川に帰ってくるのが唯一の
心の支えであったのに、その糸がぶつんと切れてし
まったのである。

翌日、取りあえず一応、父の実家に行ったが、案の
定私たちの居場所はなかった。間もなく柳川の知人の
隠居所の一室を借りてそこに移り住んだ。

柳川での生活

大連での避難生活からの疲れで、めっきり衰えてい
た父は病床に伏すようになり、私は母と二人で看病す

ることになった。弟は北九州の若松市にある、母の伯
父の家に行って面倒を見てもらうことになり、福岡県
立若松中学校の三年に転入した。本来ならば四年生な
のだが、終戦後の大連ではほとんど勉強らしい勉強は
していないので、内地の中学生とは学力の差があり過
ぎて一年降格となった。

父は、母とは再婚であった（病没した先妻の妹）の
で、年令の割には子供が小さかった。そのためか大変
に子煩悩であったので、体が弱っているときに兄の死
を知ったことは随分酷なことで、心身共にこたえたよ
うだった。その後、再び起きあがることもなく、つい
に昭和二十二年の六月に亡くなってしまった。

引揚げ当時の柳川は立花藩三萬石の城下町で、あの
激しかった戦災にも遭わず、引揚者や疎開者の流入で
かなり人口は増えていたようだったが、静かな落ち着
いた町であった。食糧は欠乏していて、私たちの食生
活は随分と質素であったが、季節の野菜などは豊富に
あって不自由さはあまり感じなかった。借りた住まい
には水道がなかったので、井戸端で食物や食器などを

洗い、同じ所で洗濯もした。炊事は、七輪に炭火を起こして煮炊きをする昔ながらの生活であった。

何よりショックを受けたことは、言葉の違いであった。初めのころは、耳慣れない方言がさっぱり分からずに、話を聞き取ることができなかった。また、大連時代のように親しい友達が一人もいないことも悲しいことで、これからのことが心細く不安になる毎日であった。

父の死後、伯父の世話で柳川から西鉄電車で三十分ぐらいの距離にある大牟田の、西日本石炭輸送株式会社大牟田支店で働くこととなった。三井鉱山や三井金属など三井系の工場が多数あって、近郷近在からの通勤者で朝の通勤電車は殺人的な混雑であった。

大牟田の市街地は、戦災で一望千里の焼け跡であった。木造の商店がぼつぼつと建ち始めて、復興の息吹が感じられていた。市内唯一のデパート松屋は、一階だけが営業を再開しており、二階以上は簡単な板扉で仕切られていて、銀行、会社、病院などが雑居していた。

私の勤め先の西日本石炭輸送大牟田支店もその中にあって、三十人ぐらいの社員が働いていた。戦時中に、石炭の統制で配炭公団ができ、西日本各地の工場地帯に石炭を運搬するために、機帆船の船主が統合してできた会社であった。昭和二十四年に配炭公団が解散したために会社も閉社となったが、それまでの二年間、大牟田―柳川間を通った。そんな通勤電車の中で三井関係にお勤めの二人の方とお友達になり、三井クラブの音楽会に誘っていただいたのが縁で、その後現在までお付き合いをしている。

昭和二十二年の八月に、「昭和二十年十一月十日、満州間島省間島において『左顧顧部挫傷兼破傷風』により戦病死」との公報を受け取った。ありし日の兄を思い出し涙が止まらなかった。

昭和二十三年の三月、旧制若松中学を卒業した弟は柳川に戻り、新制の県立伝習館高等学校に入学して二十六年三月に卒業した。その間、母も生活の足しにと、親せきの佃煮工場に働きに出た。今でいうパートである。私は会社が解散になった後、伯父の会社の

ペーパー社員となり、給料の送金のみを受けて洋裁や編み物をしていたが、昭和二十六年になって、日本キリスト協会柳川教会付属保育園に勤めることとなった。戦後、保育園が急増して保母資格を持つ人が不足してきて、福岡県庁が講習会を開催し、保母資格試験を行ったので、私も福岡市で受講し、資格試験に合格した。その後、昭和三十年の春まで約四年間、保母として働いた。しかし、柳川で一生を過ごすつもりはなく、いつか東京に出たいと考えていた。

昭和二十七年に上京した弟は、アルバイトをしなが
ら中央大学の第二部に入学した。

私も、昭和三十年の春、保育園を退職して、苦労を重ねた柳川での八年間の生活に終止符をうち、待望の東京に母と共に向かった。それから今日まで続いている、東京での新しい生活が始まったのである。

亡くなった兄が、入隊する日の朝に一冊の大学ノートを私に託した。表紙には、「鳥の声」と書かれてある。東大入学から、召集令状を受けて大学を去り、大連駅で別かれる日までの、わずか数十日の学生生活を

綴った日記であった。

あの大戦下に育ち、そして掛け替えのない青春を送り、二十年にも満たない短い一生であった若人の言葉を読むとき、肅然として襟を正しめるのである。

ごめんね、正人

神奈川県 須藤 喜美代

一 赤紙

大連駅から歩いて約三十分のところ、松風台と呼ばれる小高い丘があった。そこに日本人だけが住んでいる、鉄筋コンクリート建ての住宅が並んでいた。今という団地である。そのうちの棟の三階に私たちの家族は住んでいた。

昭和十八（一九四三）年五月に結婚してここで暮らすようになり、昭和二十二年二月に日本へ引揚者として帰国するまで、幸せな日々と苦しみの日々を過ごした。